The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関係形成期における関係の効用が罪悪感に及ぼす影響
Author(s)	八木, 彩乃
Citation	対人社会心理学研究. 2016, 16, p. 9-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57807
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

関係形成期における関係の効用が罪悪感に及ぼす影響 [1)]

八木　彩乃（神戸大学大学院人文学研究科）

他者を傷つけてしまった際に経験される罪悪感は、相手や周囲に対する向社会的行動を促すことで、その関係の修復を促す機能があると論じられている。関係修復が主たる機能であれば、相手が自分の目標達成のために役立つ程度、すなわち関係の効用(relational utility)が高い相手に対して、罪悪感が経験されやすいと予測される。実際に、いくつかの研究は、関係の効用が罪悪感の強さに影響することを示している。しかし、関係形成期のように関係が不安定な時期には社会的交換が慎重に行われることが指摘されており、関係の効用によらず、罪悪感が生起しやすいかもしれない。本研究では、参加者(N= 125)に関係形成期にある実際の友人に迷惑をかけた架空の場面を想起させ、その友人との関係の効用と経験するかもしれない罪悪感の程度を回答させた。その結果、関係の効用は罪悪感の強さと相関しており(r= .21, p= .019)、形成期にある関係でも関係の効用が罪悪感の経験の程度を予測することが示された。

キーワード：罪悪感、関係の効用、許し

問題

人は、他者を傷つけたときや規範から逸脱したと感じたときに、罪悪感を経験する。罪悪感はこれまで、向社会性あるいは協力行動の誘発といった他者志向の関心を呼び起こす、社会的機能を持つ道徳感情として、社会心理学の文脈で論じられてきた(e.g., Eisenberg, 2000; Tangney & Dearing, 2002; De Hooge, Nelissen, Breugelmans, & Zeelenberg, 2011)。例えば罪悪感の経験は、傷つけた相手に対する宥和行動を促す(e.g., Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994; De Hooge et al., 2011; Lewis, 1971: Leith & Baumeister, 1998)。さらに、被害者以外の人間への向社会的な行動(e.g., Carlson & Miller, 1987; Salovey, Mayer, & Rosenhan, 1991; Tangney, 1991; Tangney, Miller, Flicker, & Barlow, 1996)や、自己罰(e.g., Nelissen, 2012; Nelissen & Zeelenberg, 2009)などを促進することが指摘されている。

何故、罪悪感はこれらのような行動を導くのか。この疑問に対し、感情は長期的な自己利益を最大化させるように働くという観点から(Frank, 1988 山岸訳 1995)、罪悪感は有益な社会関係を形成・維持するために働くという考えが提唱されている(e.g., Trivers, 1971; DeSteno, 2009)。なかでも Nelissen(2014) は、もし罪悪感が自己利益を最大化する行動を促すように経験されるならば、相手との関係から得られる利益の期待値(つまり関係の効用: relational utility)が、罪悪感の強さを調整すると論じている。

いくつかの研究が、この考えを支持している。例えば、Nelissen(2014)の Study 1 では、独裁者ゲームを用い、実験パートナーから得られるかもしれない利益の期待値を操作することで、経験される罪悪感の程度が異なるか否かを検討している。この実験には、架空の参加者も交えた複数人が同時に参加している。実験内ではまず、参加者は自らが退屈な課題を他の参加者の一人へ押し付けるように誘導される。その後、ランダムに選ばれたパートナーと共に、相手が分配額を決める独裁者ゲームを行うことを伝えられる。なお、この実験は、独裁者ゲームでのパートナーが退屈な課題を押し付けた相手か、そうではない全く別の人か(過失: あり vs なし)、さらに、パートナーに分配ゲームの元手として渡される金額が高いか低いか(金額: 高 vs 低)という 2×2 の参加者間要因配置を用いている。実験の結果、独裁者ゲームでのパートナーが退屈な課題を押し付けた相手で、かつ分配の元手となる金額が高い条件の参加者は、それ以外の 3 条件の参加者と比べ、相手に対する罪悪感を高く報告することが示された。

さらに Nelissen(2014)は、プライミングによって相手の価値を操作した場面想定法実験や、社会的ジレンマゲームを用いた実験も行い、目標の達成に役立つ相手に対して罪悪感が経験されやすいことを明らかにしている。このように、Nelissen(2014)は、関係の効用が罪悪感の強さを規定することを一貫して示している。

上述の通り Nelissen(2014)は、関係の効用を、独裁者ゲームから期待できる獲得金額やプライミングなどにより一時的に操作している。しかし一般的な友人関係の効用は、一過性のものではない(例えば、今回のレポートでいろいろ手伝ってくれた友人は、明日以降も役に立つ友人であり続けるのではないだろうか)。この点については Ohtsubo & Yagi(2015)が、長期的な関係にある友人の総合的な有用性(目標達成に役立つ程度)と罪悪感の関係の検証をしている。この研究では、実際の友人について、その友人は幾つかの目標を達成するためにどれくらい役に立つ相手であるかを回答させ、それらをまとめたものを関係の効用として扱っている。具体的には、学生

にとっての重要な目標になりそうなものを 6 つ(大学での学業、サークル・クラブなどの課外活動、就職活動や進路選択、人間関係、アルバイト、先に挙げたもの以外の目標)提示した。そして、想定した相手がそれぞれの場面でどれほど実際的に自分にとって役に立っているか(とても邪魔になる: −3 ～ とても役に立つ: ＋3)を評定させ、その平均値を算出した [2]。以上の手続きによって測定された長期的な関係の効用は、Nelissen(2014)の研究結果と同様に、罪悪感の経験に影響を与えることが明らかとなった。

このように、Nelissen(2014)と Ohtsubo & Yagi(2015)の研究は、目の前の目標達成を目指した短期的関係、あるいは安定した長期的関係の中で、関係の効用と罪悪感の経験に正の相関があることを示している。しかし、このような関係性がみられるのは、二者間の関係の効用が今後大きく変化する見込みのないものだったからこそという可能性が考えられる。例えば、実験室で検討された短期的関係はその後の継続した付き合いを想定したものではなく、その時点での関係の効用だけが参加者にとって意味を持つものである。また、安定した長期的な関係は、既に相手との関係性が確立している状態にあり、関係の効用は将来においても変わらないという予想がつく。一方で、今後も付き合いを続けていきたいと考えているが、まだ構築過程にある関係では、将来の関係の効用が今とは変化するかもしれない。このような関係では、関係の効用と罪悪感の関係性はどうなるのだろうか。具体的には、まだ付き合いが浅い状態では将来の関係の効用が現時点での関係の効用と異なるかもしれないために、現時点での関係の効用が罪悪感を予測しないかもしれない。実際、形成期にある関係が他の関係とは異なる規範を持つことを示した研究として、Lydon, Jamieson, & Holmes(1997) があげられる。Lydon et al.(1997)は、形成期にある関係では、既に仲がよいと互いに認識されているような関係や特に親しくないと思われている関係に比べて、社会的相互作用が重要視され、慎重に社会的交換が行われることを示している。つまり、現在の関係の効用によらず、関係が十分に構築された将来に期待される利益を考慮して、関係維持のための努力がはらわれやすい可能性がある。このように考えると、関係の効用が低いとしても強い罪悪感が経験され、その結果、関係の効用と罪悪感の関連がみられなくなるかもしれない。

以上から、本研究では、関係形成時期においても、関係の効用が罪悪感の強さを予測するかどうかを検討する。

方法

回答者

関西圏の大学の大学生 125 名(男性 49 名, 女性 76 名)の回答を得た。回答者の平均年齢は 22.40 歳(SD = 8.06)であった。

手続き

場面想定法を用いた質問紙調査を行った。実験の実施にあたり、質問紙のシナリオを読む際に思い浮かべてもらう相手を、関係形成期にある友人のうちの一人とした。具体的には、“これから大事な友人になりそうな人”を想起するように指示した。参加者の内、58 名(46%)が知り合ってから 1 年以内の友人を想起していた。

まず、想起した友人に対して抱いている関係の効用を測定した。測定には、Ohtsubo & Yagi(2015)の研究で用いられた友人の有用性を測定する尺度を使用した。ただし本研究では、Ohtsubo & Yagi(2015)で用いられた 6 項目(大学での学業、サークル・クラブなどの課外活動、就職活動や進路選択、人間関係、アルバイト、先に挙げたもの以外の目標)のうち、サークル・クラブなどの課外活動の場面での役に立つ程度をたずねる項目の未回答が目立ったこと(未回答率は当該項目で 27.2%、他項目では 0.8%以下)、またこの項目と他の項目間での相関が他項目間の相関と比較して低い傾向にあったことから

Table 1 罪悪感と友人の有用性を測定する尺度の各項目間の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1. 罪悪感	-	-	-	-	-	-
2. 大学での学業	.07	-	-	-	-	-
3. 就職活動や進路選択	.13	.45**	-	-	-	-
4. 人間関係	.18*	–.04	.17+	-	-	-
5. アルバイト	.12	–.01	.14	.18*	-	-
6. それ以外の目標	.12	.18*	.32**	.23*	.09	-
7. サークル・クラブ などの課外活動	.03	–.23*	–.15	.18+	–.02	–.05

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 2 各変数の平均値・標準偏差および変数間の相関係数

	平均(*SD*)	1	2	3
1. 性別(男 = 0, 女 = 1)	[男 39%]	-	-	-
2. 関係の効用	0.98 (0.60)	.13	-	-
3. 許しへの期待	2.35 (0.60)	.03	.16^{+}	
4. 罪悪感	4.27 (0.77)	.20*	.21*	−.01

* $p < .05$, $^{+}p < .10$

(Table 1)、この項目を除いた 5 項目への回答の平均値を関係の効用として分析した [3]。この変数のクロンバックの α係数は.50 であった。これはやや低い値ではあるが、ある場面で役立つ相手が必ずしも全ての場面で役立つとは限らないため、そもそも内的整合性の低い尺度であると考えられる(Ohtsubo & Yagi, 2015)。その一方、多くの目標達成に役に立つ程度が高い相手は効用の高い相手であり、かつその平均値も高くなる。いずれの目標達成にも役に立たない相手は効用の低い相手であり、その平均値も低くなる。したがって、5 項目の平均をとることは妥当と判断した。

次に、想起した友人に対して感じる罪悪感を測定した。測定にあたって、自分が加害者で、想定した友人(シナリオでは "A さん" と表記) が被害者となる過失のシナリオを提示した。具体的な内容は以下のとおりである。

あなたは、A さんと遊びに行く約束をして、待ち合わせをしました。ところが、あなたはうっかりそのことを忘れてしまい、待ち合わせの場所に行きませんでした。後日、あなたは A さんとの約束をすっかり忘れていたことを思い出しました。

以上のシナリオを提示した後、その出来事がもし実際に起こったとしたら、友人に対してどれくらい罪悪感を経験すると思うかを、State Shame and Guilt Scale (SSGS: Tangney & Dearing, 2002)を用いて測定した。SSGS は罪悪感、恥(shame)、誇り(pride) をそれぞれ 5 項目、5 件法(1: 全く感じない～5: まさにそう感じる)で測定する尺度である。今回の分析では、罪悪感を測定する 5 項目("私は深く後悔している"、"私は自分の悪い行いが、頭からはなれない"、"私は自分が行ったことについてストレスを感じている"、"私は謝罪や懺悔したいと感じている"、"私は自分が行ったことを悪いことだと感じている")への回答の平均をとり、罪悪感得点とした(クロンバックの α係数 = .80)。また、相手が許してくれるかもしれないという期待が罪悪感の経験を低減させることが先行研究で示されているため(Ohtsubo & Yagi, 2015)、統制変数として許しへの期待を測定した。具体的には、"あなたがこの出来事についてAさんに謝らないとしても、Aさんはあなたを許してくれるでしょうか"という質問項目に4件法(1: 絶対に許してくれない～4: 絶対に許してくれる)で回答させ、許しへの期待として扱った。

本研究は他に、Ohtsubo & Yagi(2015)の Study 1 の追試として、コストをかけてでも相手に謝罪しようとする意志を尋ねる項目も含んでいた。具体的には、今すぐ相手に謝罪しに行くには用事をキャンセルしなければならないと想像してもらい、どの程度その用事よりも謝罪を優先させるかを4件法で評定させた。人々は効用の高い相手と和解することに強く動機付けられる結果、その相手に誠意を示すために謝罪によりコストをかけるだろうと予測された。しかし、本研究ではこの予測は支持されなかったため、結果の報告は罪悪感に焦点を当て、コストのかかる謝罪については省略している [4]。

結果

参加者が想定した友人との関係の効用、罪悪感、許しへの期待、それぞれの変数の平均値、標準偏差および変数間の相関係数をTable 2に示した。相関分析の結果、関係の効用と罪悪感の間に、有意な正の相関関係があることが示された。これは、Ohtsubo & Yagi(2015)の先行研究と同様の結果である。さらに、男女間で罪悪感の強さに違いがないか確認するために、*t* 検定をおこなった。その結果、女性参加者($M = 4.40$, $SD = 0.08$)の方が男性参加者($M = 4.09$, $SD = 0.13$)よりも罪悪感を強く経験していた($t(123) = 2.21$, $p = .03$)。これは先行研究の

Table 3 罪悪感を従属変数とした重回帰分析の結果

	標準化係数	95%信頼区間下限値	95%信頼区間上限値
性別 (男 = 0, 女 = 1)	.17^{+}	−.002	.347
関係の効用	.20*	.020	.373
許しへの期待	−.05	−.228	.123

注: ($F(3, 121) = 3.30$, 調整済み $R^2 = .053$, $p = .023$)

* $p < .05$, $^{+}p < .10$

知見と一貫したものである(Roberts, Strayer, & Denham, 2014)。

次に、関係の効用と罪悪感の関係が、他の変数を統制しても観察されるかどうかを検討するために、罪悪感得点を従属変数、性別、関係の効用、許しへの期待を独立変数とする重回帰分析を行った(F (3, 121) = 3.30, p = .023, 調整済み R^2 = .05)。分析の結果は Table 3 にまとめた。その結果、性別・許しへの期待の両変数が統制されている場合でも、相手との関係の効用が高いほど、参加者は罪悪感を経験しやすいことが明らかとなった(β = .20, p = .030)。また、他の変数の効果を統制した結果、上記の性別の効果は有意傾向になった(β = .17, p = .052)。相手から無条件で許してもらえるだろうという許しへの期待の効果は有意ではなかった(β = −.05, *ns*)。

考察

本研究では、関係形成期における関係の効用が罪悪感の経験に及ぼす影響について、場面想定法を用いて検証した。その結果、関係の効用が高い相手であるほど、罪悪感を強く経験することが明らかとなった。

本研究で得られた結果は、Nelissen(2014) や Ohtsubo & Yagi(2015)の知見と一貫したものであり、形成期にある関係でも、従来検討されてきた短期的、あるいは安定した長期的な関係の場合と同様に、相手との関係の効用に応じて罪悪感が調整されることが示された。よって、罪悪感は、その関係が今後変化する可能性をもっているものでも、今現在の関係の効用に応じて経験されることが分かった。このような結果になった理由として、関係に対する認識に関わらず、感情が自動的に生起している可能性が考えられる。対して、関係形成期にある相手との慎重な社会的交換は(Lydon et al., 1997)、自動的なものではなく、意識的に行われるものなのかもしれない。そうであれば、関係維持のための感情と行為には、異なる要因が介在している可能性が考えられる。

一方、許しへの期待が罪悪感の経験に及ぼす影響については Ohtsubo & Yagi(2015)と異なる結果が示され、関係形成期にある関係では許しへの期待が罪悪感の経験と無相関であることが明らかになった。このような結果が得られた理由として、関係形成期にある関係では、相手が自分をどれほど重要視しているのかといった予測が困難であるためだと考えられる。具体的には、不安定な関係では、相手が自分を大事に思っているか、それともどうでもいいと思っているかといった相手の意図の推測が困難であり、相手がこの関係の維持をどれほど望んでいるかが分からないという状態にある。このように相手の意図の予測が不正確になるために、どのくらい許してもらえそうかという予測をすること自体が意味を持たなくなり、結果として許しへの期待と関係形成期の罪悪感の間には関連が見られないのかもしれない。相手の意図をどのくらい予測できると思っているかどうかが、許しへの期待に影響するか否か、今後検討する必要があるだろう。

本研究の限界としては、関係形成期の意味を参加者の解釈にまかせざるをえなかったという点が挙げられる。実際の友人を想起してもらう場面想定法という性質上、参加者に任意の友人を選んでもらうことは避けられないが、参加者を大学1年生に限ることで、知り合ったばかりの相手が選ばれやすくなるなど、関係形成期の友人の関係を均質化できると考えられる。今後、このようなサンプルを限定した調査が必要である。また、他の限界点として、自己報告のみに基づく結果であることがあげられる。実際の関係形成期にある友人同士を実験室に集めることは、手続き上困難である。そのため、新入学後のクラスを単位とした研究など、調査方法の工夫が必要である。

引用文献

Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, *115*, 243-267.

Carlson, M., & Miller, N. (1987). Explanation of the relation between negative mood and helping. *Psychological Bulletin*, *102*, 91-108.

De Hooge, I. E., Nelissen, R. A., Breugelmans, S. M., & Zeelenberg, M. (2011). What is moral about guilt? Acting "prosocially" at the disadvantage of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, *100*, 462-473.

DeSteno, D. (2009). Social emotions and intertemporal choice: 'Hot' mechanisms for building social and economic capital. *Current Directions in Psychological Science*, *18*, 280-284.

Eisenberg, N. (2000). Emotion, regulation, and moral development. *Annual Review of Psychology*, *51*, 665-697.

Frank, Robert H. (1988). *Passions within reason*. New York: W. W. Norton.
(フランク, R. H. 山岸俊男 (監訳) (1995). オデッセウスの鎖 ―適応プログラムとしての感情― サイエンス社)

Leith, K. P., & Baumeister, R. F. (1998). Empathy, shame, guilt, and narratives of interpersonal conflicts: Guilt-prone people are better at perspective taking. *Journal of Personality*, *66*, 1-37.

Lewis, H. B. (1971). *Shame and guilt in neurosis*. New York, NY: International Universities Press.

Lydon, J. E., Jamieson, D. W., & Holmes, J. G. (1997). The meaning of social interactions in the transition from acquaintanceship to friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 536-548.

Nelissen, R. A. (2012). Guilt-induced self-punishment as a sign of remorse. *Social Psychological and Personality Science*, *3*, 139-144.

Nelissen, R. A. (2014). Relational utility as a moderator of guilt in social interactions. *Journal of Personali-*

ty and Social Psychology, *106*, 257-271.
Nelissen, R. A., & Zeelenberg, M. (2009). When guilt evokes self-punishment: Evidence for the existence of a Dobby Effect. *Emotion*, *9*, 118-122.
Ohtsubo, Y. & Yagi, A. (2015) Relationship value promotes costly apology-making: Testing the valuable relationships hypothesis from the perpetrator's perspective. *Evolution and Human Behavior*, *36*, 232-239.
Roberts, W., Strayer, J., & Denham, S. (2014). Empathy, anger, guilt: Emotions and prosocial behaviour. *Canadian Journal of Behavioural Science / Revue Canadienne des Sciences du Comportement*, *46*, 465-474.
Salovey, P. Mayer, J. D., & Rosenhan, D. L. (1991). Mood and helping: Mood as a motivator of helping and helping as a regulator of mood. In M.S. Clark (Ed.), *Prosocial behavior: Review of personality and social psychology Vol. 12* (pp. 215-237). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
Tangney, J. P. (1991). Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 598-607.
Tangney, J., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York, NY, US: Guilford Press.
Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L., & Barlow, D. H. (1996). Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 1256-1269.
Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, *46*, 35-57.

註

1) 本研究の実験実施にあたり、高石浩一教授(京都文教大学) にご協力いただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。また、執筆の御指導を頂いた大坪庸介准教授(神戸大学)、修正や翻訳などでお世話になりました布井雅人助教(聖泉大学)、Adam Smith さん(神戸大学)に感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は日本社会心理学会第 54 回大会にて発表された。

2) Ohtsubo & Yagi(2015)では、関係の道具的有用性(instrumentality)として記述されている。

3) 残りの 5 項目の中でも、未回答となっている項目を含む参加者がいた。その場合は、回答されている項目の平均を関係の効用とした。

4) 関係の効用、性別、許しへの期待を独立変数、コストのかかる謝罪を従属変数とした重回帰分析を行ったが、関係の効用からコストのかかる謝罪への効果は見られなかった(β = .09, p = .34)。今後、関係の関係形成期にある相手との和解方略について、より詳しい検討が必要である。

The effect of relational utility on the severity of guilt in the context of new relationships

Ayano YAGI (*Graduate School of Humanities, Kobe University*)

The guilt experienced after unintentionally injuring someone functions to promote relationship restoration by motivating prosocial behavior towards one's partner. If relationship restoration is the main function of guilt, it can be predicted that the degree of partner's instrumentality (relational utility) may determine guilt severity. Indeed, some recent studies show that relational utility influences the severity of guilt. But, does this also hold in the context of new relationships? A previous study showed that social exchanges are performed with care and deliberation during relationship formation. Perhaps the correlation between guilt and relational utility begins just as a relationship is starting to form. In this study, participants (N= 125) imagined a scenario involving the accidental inconveniencing of a potential friend, answered relational utility questions regarding the potential friend, and reported the guilt that they would experience. Relational utility related to the severity of guilt (r= .21, p= .019), and it predicted the severity of guilt even though the relationship was still in the early stages of formation.

Keywords: guilt, relational utility, forgiveness.